

シンクレア・ロス

「ペンキを塗ったドア」

久野幸子訳

丘をまっすぐ越えれば、ジョンの農場から父親の農場まで五マイルだった。しかし、冬は道が通行不能となり、一連の馬たちは大きく回り道をして、丘のふもとを通らねばならず、道のりは五マイルから三倍以上の十七マイルになった。

「歩いて行くかと思う」とジョンは朝食のとき、妻に言った。「一頭の馬でも丘の上の吹きだまりには重すぎるが、僕なら大丈夫、上を歩いて行ける。早く家を出れば、親父が家の雑用を済ますのを数時間手伝っても、夕食には戻れるよ。」

彼女は窓のところに行つて、息で霜を溶かし、立ったまま雪で一面を覆われた農場の庭にかたまつて建つ馬小屋や納屋を眺めていた。「昨夜、月の周りに二重の輪があったわ」と彼女は間もなく反論した。「あなたは嵐が来そうだと言つたでしょう。私をここへ一人残すのは良くないわ。確かに私は父さんと同じくらい大切よ。」

彼は不安そうにちらっと見上げた。それから、コーヒーを飲みほ

し、彼女を安心させようとした。「でも怖がるものは何もないよー嵐が始まるとしても。馬小屋の近くに行く必要はない。すべての家畜には夜までもつように飼料を与え水も飲ませた。遅くても七時か八時までには戻るよ。」

彼女は霜の降りた窓ガラスに息を吹きかけ続け、注意深く溶けたところを卵形に均斉のとれるように大きくしていった。彼は彼女を少しの間、見ていたが、もっと熱心に繰り返した。「馬小屋へ行く必要はないと言つただろう。すべての家畜に飼料も水も与えた。薪もたっぷりあるかどうか見ておくよ。それですべてうまくいくよ」

「そうーもちろんー聞いたわ」彼女の声は、あたかも言葉が霜の降りた窓ガラスとの接触で凍えたように冷たかった。「食べるものがたっぷりあり、身体を温める薪もたっぷりあるとすればー女性の欲しがるものも何もないでしょうね。」

「でも、親父は年取っているし、それに全く一人で住んでいる。

どうしたんだい、アン。今朝の君はいつもの君と違うね。」

彼女は振り向かず、頭を振った。「私のことは気にかけないで。七年間も農場経営者の妻なのよ—もう一人でいることに慣れた頃よ。」

ゆっくり、窓ガラスの霜の溶けたところが大きくなった。卵形に、それから丸く、それから、再び、卵形になった。太陽は凍った霧の上に登り、雪の上で厳しく、鋭くきらめき、暖かさの代わりに冷たさを発散させているようだった。ジョンが馬たちに水を飲ませるために外に出したとき、ゆっくり歩かせてあった二歳の仔馬の頭が馬小屋の戸口に再び立ち、凍った大気の中、頭を垂れ、脇腹に霜をつけ、背を丸め、息をするたびに湯気を立てていた。彼女は身震いしたが、振り返らなかった。澄んだ、身を刺すような光の中、何マイルも長く続くプレーリーの白い風景は、生命に無縁な領域のように見えた。遠くに見える農場でさえ彼女には孤立感を強めているのだけに見えた。ひどく広大で侘しい荒野のあちこちに散在しているの、それらの農場が人間の不屈の精神と忍耐を証明していると考えるのは難しかった。そうではなくて、それらは雪に一面を覆われた大地と太陽で凍ったような澄んだ青白い空の無情さを前に、無能で、途方に暮れているようだった。

そして、とうとう窓から振り向いたとき、彼女の顔には、あたたかもこの雪と冷たさの支配力を認めたかのような静かさが覆いかぶさっていた。ジョンはそれを気に病んだ。「もし君が本当に怖い

なら、」と譲歩して、「今日は行かないでおこう。最近、とても寒い。それだけだ。僕は万一嵐が来たとき、親父が大丈夫か知りたかっただけだ。」

「わかっているわ—本当に怖いわけじゃないわ」彼女は今、ストーブに薪を入れており、彼は彼女の顔を見ることができなかった。「気にしないで。往復十マイルあるから、早く出かけたほうがいいわ。」

「僕が一晚でも家をあけないことを今はもう知るべきだよ」と彼は彼女を元気づけようとした。「僕はどんな嵐だって気にかけなかった。結婚する前のこと—覚えているだろう？ 一週間に二回、必ず会いに行ったし、あの冬もひどいブリザードが数回あったよ。」

彼は無器用な、野心のない男で、農場と家畜に満足し、アンを無邪気に誇りにしていた。彼は、彼女が自分のような頭の鈍い人間を好きになったことに最初戸惑った。それから、とうとう彼女の愛情を確認し、感謝しながら、緊張を解き、彼自身の愛情ほど彼女の愛情が今後は安定したものでなくなるかもしれないと疑うことはなかった。今でさえ、彼女の声に落ち着きのない、考え込むような響きがあるのを聞きながら、七年も経つのに、彼が一日不在にすることがまだ彼女を悩ますことに、一瞬、言葉にならない誇りのようなものを感じた。彼女は、再び、彼の信頼と生真面目さに根負けし、「わかっているわ。ちょうど今は、あなたが家を出ると寂しいと感じるときなのよ……あなたはこれから、冷たい中を長い間歩くの

ね。顔の周りにスカーフを巻きつけさせて。」

彼はうなずいた。「途中で、ステイブンのところに寄るよ。おそらく、今晚、カードゲームをしに来てくれるだろう。ここ二週間、君は僕にしか会っていないものね。」

彼女は素早く見上げたが、それから、忙しくテーブルを片づけた。「そうすると、あなたは二マイルも余分に歩くことになるわ。そうしなくても十分冷たいし、疲れるでしょうに。あなたが出かけてから、台所の木工部にペンキを塗るわ。今度は白く塗る―秋にペンキを購入したのを覚えているでしょう―部屋がもっと明るくなるわ。忙しくすれば、一日を長いなんて思わなくて済むでしょう。」

「でも彼のところに行くよ」と彼は言い張った。「風が来ても、彼が来てくれると知っていれば、安心するだろう。君にはそれが必要だ、おそらく―僕のほかに話かける誰かがね。」

彼女はストーブのそばで、一瞬、じっと立っていた。それから、彼のほうに不安そうに向き直った。「それなら、ひげをそってくれる―ジョン、出かける前に?」

彼がいぶかしそうに彼女をちらっと見ると、彼女は彼の目を避けて、説明しようとした。「彼はあなたが戻ってくる前にここに来るかもしれないわ、そうすれば、あなたにはひげをそる機会がなくなるわ」

「でもステイブンだけだろう。―僕たちはどこにも出かけないんだよ。」

シンクレア・ロス「ペンキを塗ったドア」(久野幸子)

「だけど、彼はひげをそっているでしょう―それを言いたいのよ―あなたにも自分自身にもう少し時間をかけて欲しいわ。」

彼は立ち上がり、彼の顎の無精ひげをなでながら、「ひげをそったほうがいいのだろうが―ひげをそると、皮膚が柔らかになり過ぎるのだよ―とくに風に向かって歩くときはね。」

彼女はうなずき、寝室から厚手のソックスと毛糸編みの大きなセーターを持ってきて、彼が衣服を身に着けるのを手伝い、彼の顔と額の周りをスカーフでくるんだ。「ステイブンに早く来るように言うよ」と彼は出かけるとき、言った。「夕食までに戻るよ。僕がしなければならぬ雑用がありそうだから、六時までに戻らなかつたら、待たないでね。」

寝室の窓から彼女は彼がほぼ一マイル、道に沿って歩くのを見ていた。とうとう彼女が振り向いたとき、火は消えており、家の中に冷たさが侵入していた。通風孔を開くと、再び炎が上がったが、テーブルを片づけ続けているうちに、彼女の動きはひそかで不自然なものになった。静寂―無情の畑と太陽で凍る空の静寂―が彼女にのしかかり、あたかも生きてるように、無慈悲に待ちかまえて、今、彼女とジョンの間に何マイルにも渡って潜んでいた。彼女は突然、緊張し、じっと動かず、静寂に耳を傾けた。火がパチパチ音を立て、時計がチクタク鳴った。静寂はいつもそこにあった。「馬鹿だわ」とストーブのところへもう一度戻り、薪を入れ、挑むように音を立ててお皿を洗いながら、呟いた。「馬鹿だわ」「暖かくて安全なのに

一九

—馬鹿だわ。彼の外出は、ペンキを塗るのにいい機会だわ。日はすぐ暮れるでしょう。考え込んでいる時間はないわ。」

十一月以来ずっと、ペンキ塗りはより暖かな天候を待っていた。今日のような日の霜の降りた壁は乾くと、ペンキにひびが入り、剥げ落ちるだろうが、彼女には両手を働かせ、募る寒さと孤独を押しつける何かが必要だった。ペンキの缶を開け、少しのテレピン油を混ぜながら、「まず」と彼女は声に出して言った「家をもっと暖かくしなくては。ストーブを薪で満たし、すべての熱が外に出るようオープンドアを開けよう。隙間風が入らないように窓枠に何か詰めよう。そうすれば、もっと元気になるわ。気が滅入るのは寒さのせいよ。」

彼女はきびきびと動き、ちょっとした仕事を注意深く、わざと真剣にやり、彼女の思いをそれに縛りつけ、彼女自身と周りを取り囲んでいる雪や静寂との間のスクリーンとした。しかし、ストーブに薪が入られ、窓の周りが詰められてしまうと再び一層辛くなった。彼女の刷毛がシュッシュと寝室のドアを塗っているとき、時計がチクタク鳴り始めた。突然、彼女の動きはあたかも誰かがその部屋に入ってきて、彼女を見守っているかのように、正確で、落ちついて、自意識的になった。再び、静寂が攻撃的に辺りに漂った。火が起こる、パチパチ音を立てた。それでも静寂はそこにいた。「馬鹿だわ」と彼女は繰り返した。「農場経営者の妻は一人でいることに慣れなくては。こんなふう以降参してはいけないわ。くよくよすべ

きじゃない。今から数時間すれば、二人はここにいるわ。」

彼女の声の響きが彼女を安心させた。彼女は言った「おいしい夕食を準備しよう。トランプゲームのあとのコーヒーのために、彼の好きなレーズンを入れたケーキを焼こう……三人だけだから、私は見ていよう、ジョンに勝負させよう。四人だともっといいけど、少なくとも話せるわ。それが必要なのよ。ジョンは決して話さない。彼はもっと強いので—そんな必要はないのね。でも、彼はステイブンが好きなよ—隣人たちが何を言おうと。おそらくジョンはステイブンを再び来させるし、他の誰か若い人も。そうすると二人とも若い気分でいられると思うから……それから、気がつかないうちに三月がくるわ。三月にはまだ寒いときもあるけど、気持ちは同じじゃないわ。少なくとも春について考えられるもの。」

彼女は今、春について考え始めた。彼女の言葉を凌ぐ思いが、再び彼女を孤独と常に潜む静寂の中に残した。最初は、熱心で希望に溢れていたが、それから、歯を食い絞り、反抗的になり、孤独になった。窓が開けられ、再び太陽と霜の溶けた大地、成長する、生けるものへの衝動。それから、朝、四時半に始まり夜の十時まで続く日々。ジョンが食物をがつがつ食べ、殆ど一口も話さず、彼女が町や訪問について話しても、疲れた野獣のような目を彼女に向ける食事の時。

なぜなら春は再び単調でいやな骨折れ仕事だった。ジョンは決して助けてくれる人を雇わなかった。彼は抵当権から自由になった農

場が欲しく、それから、彼女に新しい家ときれいな衣服を与えたかった。ときどきは、最上の収穫があっても、払い終わるまでに長い期間が必要だったので、彼女は抵当権の支払いを少し待ってもらおうほうがいいと思った。彼らが疲れ切ってしまう前に、彼らの最上のときが過ぎてしまう前に。彼女の望んでいた人生は、ただ家や家具ではなかった。ジョンという存在であり、彼女がそれを着るには年取り過ぎているときのきれいな衣服ではなかった。しかし、ジョンにはもちろん、何もわかっていなかった。彼にとっては、彼女が衣服を持つことだけが正しいことであり、他に何もできないので、彼女ら彼女に与えるために十五時間も奴隷のように働くことだけが正しいことだった。彼の献身には、彼に犠牲の必要を感じさせる不可解な克服したい謙遜の気持ちがあった。そして、彼の筋肉が痛み、彼の両足が疲れで無神経になるほど重くても、それは少なくとも彼の大きな太った身体と単純な心を償ってくれた。何年も何年も彼らの生活は同じように単調に過ぎた。彼は馬を畑で働かせ、彼女は牝牛の乳を搾り、馬鈴薯の畑を鋤で耕した。骨の折れる仕事をしたお蔭で彼は数か月分の給料を節約し、秋に払う抵当権の支払い金に数ドル加えた。しかし、それすべてがもたらしたのは、彼女から彼の交わりを奪い、彼を退屈な男にし、ほかの生きかたをすれば、そうだったであろう状態より、より老けさせ、より醜くした。彼には彼らの生活を決して客観的に見ることはできなかった。彼にとって問題なのは、犠牲によって彼が何を実際に達成したかではなく、犠

シントレア・ロス「ペンを塗ったドア」(久野幸子)

牲そのもの、彼女のために何かをやったという―身降りであった。そして、彼女は、わかっているのです、黙っていた。どれほど無駄であっても、そのような身降りには、軽々しく一掃できない雅量のようなものがあつた。「ジョン」と彼女はしばしば話し始めたものだった。「あなたは働き過ぎよ。誰か人を雇って―たった一か月でもいいわ」しかし彼は彼女を微笑みながら見下ろし、次のように答えただけだった。「僕はかまわないよ。僕の手を見てごらん。働くためにできているよ。」彼の声には、彼女の思いやりが却って彼女に彼女に尽し彼女への献身や忠誠心を証明したいとより強く決心させることになる固い信念の響きがあつたからである。

そのような思い、は無駄だった。彼女は知っていた。彼女に反抗を禁じるのは、それらが無駄なものとする彼の献身だった。だが、何度も何度も、ときにはそれらの佳しさを前にじっと背を丸め、ときにはそれらがもたらした苛立ちや怨念に調子を合せるように鋭く、刷毛を走らせながら、彼女はそれらについて繰り返し考えた。この今、冬は、彼らにとって怠けていられる季節だった。彼女はときには八時まで、ジョンは七時まで寝ていることができる。食事をゆっくり長引かせ、読書し、トランプをやり、隣人を訪ねることができる。くつろぎ、気楽に楽しむことができるときだったが、しかし、いらいらしながら、落ち着きなく、春を待ち続けた。彼らは労働によってではなく、労働の精神によって強制されていた。彼らの生活に浸み込み、怠惰とともに罪の意識を運ぶ精神。ときどきは

遅くまで起きていて、ときどきはトランプゲームをやったが、しかし、いつももっと重要なことをすべきではなかったのかという思いに責められた。ジョンはストーブの火の様子を見るために五時に起きたときも、ベッドに戻らず馬小屋まで出かけたがった。彼は食事のテーブルについたとき、急いで食事をとり、椅子を再び押しつけた、習慣から、真の労働本能から、ストーブにもっと薪を入れるだけ、あるいは、地下室に降りて、牝牛のためにビートや蕪を細かく切るだけのことだったのだが。

そしてとにかく、ときどき彼女は自問した、どうして決して話さない人に向かって話そうとするのだろうか。収穫と家畜と天候と隣人のこと以外話すことが何もないのになぜ話すのだろうか。隣人たちも、また、いつも同じなのに、収穫と家畜と天候とほかの隣人たちのこと以外話すことが何もないのに、なぜ訪ねるのだろうか。どうして、学校の校舎でのダンスに出かけ、結婚して七年目なので、年配の女性たちの一人として座り、あるいは労働のために腰が曲がり、疲れ、老いた農場経営者たちとキーキー鳴るヴァイオリンの音に合わせ、ワルツを踊るのだろうか。一度、夜、六、七回スティーンと踊ったことがあり、そのことについて彼らは何か月もうわさしていた。家にいるほうが、楽だった。ジョンは決して踊らなかつたし、楽しまなかつた。いいスーツを着、いい靴を履くと、彼はいつも気づまりそうだった。寒い季節には一週間に一、二度より以上に、ひげをそるのが嫌いだつた。家にいるほうが楽で、窓から厳し

い表情の畑を端から端まで眺め、日数を数えて次の春を楽しむに待つほうが楽だつた。

しかし、今、冬の静寂の中に自分自身一人でいて、次の春が実際はどんなものか、彼女にはわかつた。この春—次の春—来ることになるすべての春と夏。その間に、彼らは年老い、身体が歪み、彼らの心が彼らの生活のように乾き続け、空虚になり続けた。「いけないわ」。彼女は声に出して再び言った。「私は彼と結婚した。彼はいい人。私はこんなふりにしてはいけないわ。間もなく正午になる。そして、夕食について考えるときだわ。：おそらく彼は早く来るでしょう—ジョンが馬小屋の仕事を終わるとすぐ、トランプゲームがやれるわ。」

再び、寒くなってきたので、彼女はペンキ塗りを中断し、薪をストーブに入れた。しかし、今度は暖かさがゆっくりと広がった。マットを外側のドアのところまで押し出し、窓のところへ戻り、窓枠に詰めてあった羊毛のシャツを軽くたたいて押し込んだ。それから、彼女は部屋の中を歩きつ戻りつし、火を掻き立て、ストーブの蓋をガタガタさせ、再び、歩いた。火がパチパチ音を立て、時計がときを刻んだ。静寂は前よりもっと熾烈になり、微かにうめくような調子になった。彼女は爪先立ちで歩き始め、耳を傾け、肩をすくませ、聞いていたが、それが、家の軒を声をふりしぼりすすり泣いて通る風の音だとはしばらくは気づかなかつた。

それから、彼女は窓に向かい、再び見るために、素早く短い息で

霜を溶かした。ぎらぎらする輝きはなくなっていた。吹きだまり全体に、雪の素早い蛇のような舌先が広がっていた。彼女にはそれがどこから来たのか、どこに消えるのか、目で追うことができなかつた。あたかも中庭全体で、近づいてくる嵐を待ちかまえる風の警告に起こされ―雪が目覚め、震えているようだった。空は薄暗くなり、白っぽい灰色になっていた。雪も、待ちかまえているように、移動し、大地にくっついていった。彼女が見守っていると、目の前で粉雪のたてがみが馬小屋のより暗い背景に対して、胸の高さまで持ち上がり、一瞬、怒り狂ったように放り出され、それから、あたかも鞭で服従と抑制へと矯正されたように鎮まった。しかし、ほかの雪が最初の雪よりもっと無鉄砲に、情け容赦なく降り続いた。別の雪が彼女の見える窓に対して旋回し、突進してきた。それから、不気味にしばらくの間は、怒った小さな雪の蛇しかいなかった。風が吹き、軒に鉄線で留めてあった樋がキーキー音を立てた。遠くで、空とプレーターはお互いに溶け合って分け目もなく一つになった。彼女の周りが一つに集まった。すでに押しあい、そして、囁くように来るべき怒りの前兆が軽く震えていた。再び、彼女は雪のたてがみが跳び上がり、今度はとても濃厚で高くなったので、納屋も馬小屋もすべてぼんやりとなったのを見た。それから、他の雪が、手に負えなくなつて旋回した。そして、とうとう、それらが立ち去つたとき、馬小屋は以前よりぼんやりとした輪郭を示しているようだった。雪は長い槍の先のように北からまっすぐに降り、緊張する風によつ

シントレア・ロス「ペンキを塗ったドア」(久野幸子)

て、平行に運ばれていた。「彼は間もなく帰るわ」彼女は呟いた。「家に向かっているの、彼の背後だと思ふ。彼はすぐ出発するだろう。彼は二重の輪を見たもの―どんな嵐になるのか、知っている。」

彼女はペンキ塗りに戻った。しばらくの間、彼女の思いのすべてはブリザードの中で、丘を越え、必死で嵐の中を歩いているジョンの姿を半ば心配することに向かつていたので、刷毛の動きは緩かった。しかし、怒ったように再び塗り始めた。「嵐が来るのはわかっていたわ。彼にそう言ったもの―しかし、私が何を言っても無駄だわ―大柄で頑固な馬鹿なひと―彼は自分のやりたいようにやる。私はどうなるうが気にしない。こんな嵐では、決して家に帰れないわ。帰ろうとさえしなないと思ふ。彼が父さんのお相手をしている間、私に彼のために馬小屋の世話をし、膝まで雪に埋まりながら、―殆ど凍死寸前で―骨折つて進もうとしているのよ。」

彼女は自分の言葉を、本心から口にし、信じたわけではなかった。彼女には不満があること、彼女の反抗心を正当化し、彼が彼女の不幸に責任があることを証明するための、自分を納得させるための努力だった。彼女はまだ若く、興奮と気晴らしを求めている。そして、ジョンの強い信念が彼女の虚栄心を非難し、彼女の不満を無力でつまらないものにした。彼女はいらいらしながら、言い続けた。「もし彼がときどき私に耳を傾け、あんなに頑固でないなら、私たちはこんな家には住んでいないだろうに。二部屋だけで七年間―七年間で、新しい家具は一つもないわ……そう、あたかもペンキを塗

れば、とにかく、変えることができるでも言うように。」

彼女は刷毛を洗い、再びストーブを薪で満たし、窓のところに戻った。窓ガラスに霜が降りたのだろうと彼女が考えた何も無い白い瞬間があり、渦巻く雪を通して気まぐれな影のように、馬小屋の屋根が見えた。信じられなかった。突然、狂ったように怒る嵐が彼女の顔から、吹くれ面を吹き飛ばした。彼女の目が少し恐れでどんよりした。唇が白くなった。「彼が今、家に向かって出発したら」と静かに呟き、「でも、彼は出発しないわ。——私が大丈夫で、——ステイブンが来ると知っているもの。丘を越えようとするわけがないわ。」

彼女はストーブに向かい、両手を広げて暖をとった。彼女の周りでは、今、空気が壁の揺らぎで息をしているように、絶えず、揺れ動いているようだった。彼女は聞きながら、静かに立っていた。ときどき、風が鋭い、残酷な唸り声を上げた。ときどき、緊張した何分も続く強風になり、押し殺したように、強固に静かになった。それから、どこかにひそんでいた恐ろしい声が旋回して集まり、攻撃を始めた。軒の樋はキーキーとのこぎりを挽くような音を立てていた。彼女は窓のほうを眺め、自分の病的な思いに気づいて、コーヒーを淹れ、二口、三口、飲もうとした。「彼は出発しないと思う」と呟いた。「彼は父さんをこんな雪のとき一人にできないわ。ここは安全だし、気に病むことは何もないもの。もう一時過ぎだわ。ケーキを焼き、ステイブンのために夕食を準備する時間だわ」

しかしながら、間もなく、彼女はステイブンが来るだろうかと疑い始めた。こんな嵐では、男性でも一マイルを歩くのさえ躊躇するだろう。とくに、ステイブンは誰かの雑用のためにブリザードに立ち向かうような人間ではなかった。彼にはとにかく、面倒を見なければならぬ自分の馬小屋があった。彼が嵐になればジョンが家に戻ってくると考えるのは当然だった。別の男なら——彼の妻を第一にしただろう。

しかし、彼女は夜を一人で過ごすことを予想してもあまり恐れや不安を感じなかった。彼女がこのように自分の才覚だけで過ごすのは始めてのことだし、窮地に立たされ冷静に見積もらなければならなくなったときの、彼女の反応は、次第にそれを冒険と責任が伴うと感ずるといふものだった。それが彼女を刺激した。夜になる前に、彼女は馬小屋に行って、すべての家畜に飼料を与えなくてはならない。ジョンの衣服で身を包んで——片手に紐の玉を持って、どんなに嵐がひどくなくても、彼女が住宅に戻る道を見つけられるように一方の端をドアに結ばなくてはならなかった。彼女は人がそうすると聞いたことがあった。突然、生活がドラマチックになった。それまで、彼女は窓から見ていただけで、雪を体験していなかったからである。

十分な長さの紐を見つけ、ちょうどいいソックスとセーターを選ぶのにはぼ一時間かかった。やり始めるずっと前にジョンの衣服を試し、着替え、また、着替え、干し草を集め、吹きだまりの中を苦

心して進むとき、身体が動く余裕があるのか、部屋の中を大股に歩いてみた。それから、脱ぎ、しばらくは彼の好きなレーズン入りの小さなケーキを忙しく焼いた。

夜は早く来た。戸口で、一瞬、確信がないので、彼女はしり込みした。光がゆっくり曇ってゆくのが、捨てられたという筋の通らない思いで彼女をわしづかみにした。見知らぬ土地を何マイルも束縛されないまま、ひそかに退却する同盟国のようだった。のたくる雪のハリケーンが小さな住宅に猛威を振るうのを見ながら、彼女は自分を奮い立たせた。「私が飼料を与えなければ、家畜は耐えられないだろう。もう殆ど夜だし、一時間はかかる仕事だわ。」

おずおずと、紐を玉から少しずつ解き、戸口の風よけからこっそり出た。一陣の風が彼女を数ヤード運び、それから、道の向こうに、それとわからず、濃い白い渦巻になっていた吹きだまりに彼女をまっさかさまに突っ込ませた。ほぼ一分間、彼女は息もつけず、目がくらんで、うずくまった。雪は彼女の口にも鼻孔にも入り込み、スカーフの内側や袖の中まで入り込んだ。彼女が身体をまっすぐにしようとしたとき、彼女の顔に窒息させるような突風が襲い掛かり、彼女の息が再び止まった。風が四方から、どなりつけるように、怒り狂ったように吹いた。嵐が彼女を見つけ、全力で彼女を抹殺しようとしているようだった。突然パニックに襲われて、両腕で一瞬もがき、押し戻され、吹きだまりに大の字に倒れた。

しかし、今度は彼女が立ち直って、嵐の鞭と強打によって目覚め、

シンクレア・ロス「ペンを塗ったドア」（久野幸子）

怒りを再熟させた。しばらく彼女は衝動的に、風に立ち向かい、強打に強打で打ち返した。それから、彼女のがむしゃらな力は訪れた時と同じように突然抜け落ち、疲れ果ててしまった。突然、状況を理解した彼女は馬小屋について考えることが出来なくなり、そのよな嵐の中で、自分の無力さを認識した。そして、この認識が彼女に新しい力を与え、この時間を必死で耐えさせた。一瞬、風が彼女を抑え、無感覚にし、しっかり支配した。それから、彼女はゆっくり遙か前方を目指して、再び住宅に向かって手さぐりで進んだ。

住宅の内部で、ドアに寄りかかって、じっとしばらく立った。もう夜だった。ストーブの上の部分に鈍い赤色に燃えていた。嵐にかまわず、時計が小さな愚か者のように、無意識に自己満足的に、チクタクときを刻んでいた。「彼は行くべきじゃなかったわ」彼女は静かに呟いた。「彼は二重の輪を見たし、知っていたわ。私を一人残すべきじゃなかったわ」

それほどブリザードはひどく、狂ったように、圧倒的だったので、住宅の安全さえ信じるのができなかった。彼女の周りの暖かさや風ぎは本物でなく、信頼できなかった。彼女はまだ、嵐に翻弄されていた。身体をドアに強く押し付けていることでかろうじて嵐を食い止めた。恐れずには動けなかった。痛みや緊張を解くことができなかった。「彼は行くべきじゃなかった」と繰り返して、馬小屋について考え、無力さゆえに自分を責めた。「馬小屋で家畜たちが凍死してしまうのに、私は行けない。彼は私のせいだと言うだろう。私

二五

がやろうとしたことを信じないだろう。」

そのとき、ステイブンが来た。驚いたが、素早く、落ち着きを取り戻し、彼女は彼を中に入れ、ランプに灯をともした。彼は彼女を一瞬、見つめていたが、帽子をほうり投げ、テーブルのそばに立っていた彼女のところへやって来て彼女の両腕をつかんだ。「顔が白いよ。どうしたんだ。僕を見て」そのようなちよっとした瞬間に主人然としているのは彼らしかかった。「もっと思慮深くすべきだよ—僕自身も途中で死にそうだったよ。」

「あなたが来て下さらないのではと心配だったの—ジョンは早く家を出たし、馬小屋があるし……」

しかし嵐は彼女に氣力を失わせていた。そして、突然、彼に触られ、声を聴き、彼女を捉えていた恐怖が安堵の興奮状態に変わった。彼女は無意識に彼の腕をつかみ、すすり泣いていた。彼はしばらく静かにしていたが、それから、彼のもう一方の腕で彼女の肩を抱いた。それは心地よく彼女は突然、鎮まりそして安全だという感覚に捉えられ、気が緩んだ。彼女の両肩は緊張が解けたので、震え、それから、ぐったりし、静かになった。「震えているね」彼は静かに彼女をストーブのほうに引き寄せた。「もう大丈夫—怖がることはないよ。僕が馬小屋を見てこよう。」

それは静かで、同情的な声だった。だが、横柄さと嘲笑さえ微かにあったので、彼女は素早く身体を離し、せせせとストーブに薪を入れた。微かな笑いを浮かべて、彼は彼女が再び彼を見るまで観察

した。微笑みは横柄であったが、同情的でもあった。ステイブンの微笑みは、従って、非難するのが難しかった。それは彼の瘦せた、まだ少年らしさの抜け切っていない顔に奇妙な傲慢さとともに光っていた。顔の特徴も微笑みもジョンやほかの人のとは違っていた—わがままで馬鹿にしているようで、だが、ナイーブで、彼が意識しているのは相違そのものというより、彼が当然のように手に入れる長く親しんだ特権であった。彼は姿勢が良く、背が高く、肩が張っていた。髪の毛は黒く、短く刈っており、唇は柔らかく厚く、大きかった。彼女が素早く比べてみると、ジョンはずんぐりして下頬が大きく、描背だった。ジョンは彼女の前では無力で、彼の態度には一種の謙遜と驚きがあった。そして、ステイブンは今、女性というものが秘密でも幻想でもない男性のもつ世慣れた落ち着きをもって、彼女を値踏みするように微笑んだ。

「来て下さって親切なこと。ステイブン」と彼女は答え、それらの言葉は突然の無意味な笑いに変わっていった。「こんな嵐の中を—私のためにわざわざいらしたのね。」

なぜなら、彼の思いががり、彼女の瞬間的な弱さにしか過ぎなかったものへの彼の誤解は、彼女の怒りを駆り立てる代わりに、彼女の中に潜んでおり、長い間活用されていなかった女性性の本能と源を呼び覚ましたからである。彼女は、熱いものを感じ、挑まれたように感じた。これまで常に、彼女にはなにかわからなかったものが身近にあった。ジョンと暮らし始めたころにも、活力に溢れ、手

招きしているような、意味深長なものがあつた。彼女には理解できなかったが、わかっていた。その瞬間の手触りは申し分なく夢のようだった。信じられないと気づいたが、黙認した。彼女はジョンの妻だった―知っていた―だが、彼女はここに立っているステイブンがジョンと違うことも知っていた。その知識がしつこく繰り返すように、彼女自身には思いも動機もなかつたし、判断力もなかつた。突然のちょっとした盲目的な興奮に対して、用心深くかまへの姿勢をとり、彼女は彼を避けた。「もう暗いわよ。もし雑用をやつて下さるなら、急いだほうがいいのでは？ 手伝わないで。自分で脱ぐことができるから。」

一時間後、彼が馬小屋から戻つたとき、彼女はドレスを代え、髪を結び直し、顔を少し紅潮させていた。やかんから熱いお湯をたらいに注ぎながら、彼女は平静に言った「顔と手を洗い終わるまでに夕食は用意できるわ。ジョンは待たなくていいと言っていたの。」

彼は彼女をちょっとの間、見た。「彼が帰つて来ると思つてはいないよね。風の吹きかたから―」

「もちろん、帰るわ」話しながら、彼女は顔に紅潮が増すのを感じていた。

「トランプゲームをやりましょう。彼がそう言っていたわ。」

彼は顔と手を洗い続け、それから、二人がテーブルに座り、再びその話題に戻つた。「そう、ジョンは帰ってくるのか。何時に帰ると思つているの？」

シンクレア・ロス「ペンを塗つたドア」(久野幸子)

「七時ごろか、もう少し遅くなると言ったの」ほかのときでもステイブンとの会話はいつも活発で、自然だった、が、突然、彼女はあるかもしれない。家を出るとき、彼が言っていたことよ。どうして聞くの？ ステイブン。」

「ただどうかなあと思つただけさ。今晚は厳しいことになるよ。」
「あなたはジョンを知らないわ。彼を止めるには、嵐以上のものが必要よ。」

彼女は再び見上げると、彼は彼女に向かって微笑んでいた。先程と同じ、横柄さ、同じ、嘲笑と値踏みのねじれたものがあつた。それが彼女をひるませ、どうしてジョンが帰るのを待つふりをするのか、どうして防御本能が彼女に待つふりを強要するのか、自問させた。このとき、彼の傲慢さは、身がまえ動揺させる代わりに、彼女に自分がドレスを代え、髪を結び直したことを思い出させた。突然の静寂が襲つてきて、その中で、彼女は風のピューと鳴る音と、軒ののこぎりのきしるような音を聞いた。二人とも話さなかつた。ステイブンと彼の容赦のない微笑みには、何か奇妙な、何か怯えさせるものがあつたが、中でもとりわけ奇妙なのは、親近感であつた。彼女が一度も知つたことのない、それでいて、知つていて、常に期待し、待つていたそのステイブンだった。彼女が感じていたのは、彼自身というより彼のもつ必然性だった。ちょうど彼女が雪と静寂と嵐を感じたように。彼女は視線を下げ、彼の肩越しに、窓

を、ストーブを見続けたが、彼の微笑みは今、彼から離れて存在し、静寂に混じり、ともに舞った。彼女はカップをかちんと置いた—嵐の吹きすさぶ声に耳を傾けた—いつも彼の微笑みがそこにあった。

彼は話し始めたが、彼女の頭は彼の言葉の意味を見失っていた。素早く、彼女は再びジョンと比較し始めていた。彼の顔はジョンの顔とは違って、ハンサムで若く、きれいにひげがそってあった。素早く、どうすることもできず、認知できない、容赦のない優位で、彼女を支配しようとしていることを感じ、この新しい、活力のある生命に突然脅威を感じ、それでいて惹かれるように感じた。

風の攻撃で部屋が揺れたとき、彼らの間でランプが揺れた。彼女は火を再び燃え立たせようと立ち上がり、彼は彼女について行った。長い間二人は腕を殆ど触れあわせながら、ストーブの近くに立っていた。ブリザードが一度住宅を鳴らしたとき、ジョンがドアのところにいるのではないかと彼女は周りを鋭く見回したが、静かに彼は彼女を制した。「今晚は帰らないよ。君はもう決心したほうがいいよ。こんな嵐の晩に丘を越えてくるなんて、自殺行為だよ。」

彼女の唇は突然、答えようとして、彼の声にある確かさを受け流そうとして、震え、それから、固く結ばれ、血の気が引いた。彼女は今、怖くなった。彼の顔がジョンの顔とそんなにも違うこと—彼の微笑み、を彼女が非難できないこと—が怖くなった。嵐が怖く、彼と二人だけでここに孤立していることが。トランプ遊びをやるろうとしたが、彼女は壁のキーキー鳴る音や揺れにぎょっとし続けた。

「夜には激しくなるよ」彼は繰り返した。「ジョンにとってもね。少し落ち着いて、心配するのをやめて、僕に少し注意を払ってよ」

しかし、彼の声の調子には、彼の言葉に反するものがあった。と言うのは、それは彼女が心配していないこと—彼女の唯一の心配は戸口にいるのがジョンではないかということであるのを暗示していたからである。

そして、暗示は続いた。彼は彼女のためにストーブを薪で一杯にし、カードをシャッフルし—勝ち—シャッフルし—それでも暗示はそこにあつた。彼女は彼の会話に答えようとし、ゲームについて考えようとしたが、カードについてはお手上げで、代わりに彼女は尋ね始めた。彼は正しかったの。だから彼は微笑んだの。だから彼は期待し、確信し、待っているように見えるの。

時計が時を刻み、火がパチパチと音を立てた。いつも、それはそこにあつた。彼が自分のもち札について考えているとき、そっと一瞬、彼を見守った。ジョンは、結婚する前でも、こんなふうには見えなかった。今朝だけ彼女は彼にひげをそるよう頼んだ。なぜなら、ステイブンが来るから—彼女は並んでいる二人を見るのが怖かったから—彼女自身の心の奥で、このようなときが来ることを知っていたから。うさんくさい、許されない、同じ認識がステイブンの微笑みの中で今、明白になった。「寒そうだね」彼はとうとう言った。彼のカードを手から離し、テーブルから立ち上がりながら。「とにかくトランプゲームはもう止めよう。しばらくストーブ

のところ、温まろうよ。」

「でもまず、毛布をドアの上に掛けるほうがいいと思う。このようなブリザードが来るときは、いつもこうするのよ」。正気の、ありふれた動きにはほっとする解放感、ちょっとした間、彼女が自分を取り戻す瞬間があるようだった。「ジョンは釘を打ちつけておいたのよ。隙間風が入らなくなるの。」

彼は彼女のために椅子の上に立って、彼女が寝室から運んだ毛布を掛けた。それから、二人は黙って立ち、毛布が軒の周りから噴き出していた剣のような風の前で揺れ、震えるのを見守った。「忘れていたわ」と彼女はとうとう言った。「寝室のドアにペンキを塗ったの。そこの一番上、見て、毛布を汚してしまったわ。」

彼は彼女を珍しげに見て、ストーブのところへ戻った。彼女は彼のあとについて行き、そのような嵐のときの丘を想像し、ジョンが帰ってくるのかどうか、考えた。「人はそんな嵐の中では、生きていられないよ」と彼は突然、オープンドアを下げ、その両側に二人の椅子を寄せながら、彼女の思いに答えた。「彼は君が安全だと知っているよ。とにかく、彼が親父さんを一人にできるとは思えない。」

「風は彼の背後で吹くでしょう」と彼女は繰り返した。「私たちが結婚する前の冬―その冬、どんなブリザードにも、彼は必ず来たわ……」

「こんなブリザードに？ 丘の上では、彼は百ヤード先の方向を

シンクレア・ロス「ペンキを塗ったドア」(久野幸子)

見つけることができないよ。一瞬、耳を傾けて、自分自身に尋ねてごらん。」

彼の声は今、より柔らかく、親切になったようだった。彼女は彼の微笑に再会した。値踏みを一ひねりしたもの、それから、長い間、黙って、緊張して座り、彼の視線を注意深く避けた。

すべてが今これに依存しているようだった。彼女が数時間前、嵐に対してドアを支えたときと同じだった。彼は彼女を微笑みながら見ていた。彼女は動くことができず、両手をほどいたり、目を上げたりした。炎はパチパチと音を立て、時計がときを刻んだ。嵐はこじ開けんばかりに壁に突進していた。彼女の筋肉はひどく硬直し、向こう見ずになっていたので、周りの部屋が泳ぎ、旋回しているようだった。休息するにはあまりに硬直し、緊張していたので、思わず、頭を上げると彼と目が会った。

一瞬だけ、息をするためだけを、耐えられなくなった緊張をほぐすためだけを願っていたのだが、彼の微笑みにあったのは、彼女が恐れていた横柄な値踏みの代わりに、暖かさと同情のようなものだった。ある判断力が彼女を刺激し、励まし―一瞬、彼女が何を恐れていたのか、不思議に思わせた。嵐が凪ぎ、彼女は穏やかさと避難所を見つけたようだった。

あるいは、おそらく、変わっていたのは、彼の微笑みではなく、彼女なのだという思いが彼女を捉えた。長い間、風にきしむ静寂の中で、増大した掟と忠誠心という足枷をはめられていない真の彼女

自身が現れていた。彼女は今、彼の値踏みするような様子は、満たされない女性の判断に過ぎず、この瞬間まで、許されないと気に病んでいた彼女が、すでになくした日常的忠誠、心を固執する意識から、彼を責めていたのだと気づいた。

なぜなら、ステーキブンはいつでもずっといた。彼女には今なかった。七年間—ほぼジョンと同じ位長く、彼らが最初にダンスを踊った夜以来、彼がいた。

ランプは燃えつきようとしていた。そして、ぼんやりした光の中、深い静寂と激しい嵐の中、彼らはお互いに見つめ合った。彼女の顔は白く、まだもがいていた。彼の顔はハンサムで、ひげがきれいにそってあり、若かった。彼女の目は狂ったようで、無我夢中、あたかもほかの全てを排除するように、あたかも正当化の理由を見つけないかのように、彼に注がれていた。彼の目は冷静で空白で、期待に少し弱まっていた。光は弱まってきており、彼らの周りには影が大きくなり、抑えられ、共謀していた。彼はまだ微笑んでいた。彼女の両手は再び握りしめられ、白く、固くなった。

「でも彼は何時も来たわ」彼女は繰り返した。「どんなに荒れても、どんなに寒くても、このような夜でさえも。どんな嵐でも—」

「こんな嵐はなかったよ」彼の微笑みには静かき、彼女を安心させるような、単純さのようなものがあった。

「君自身も、少し外にいたよね。彼は帰ってくるのに、丘を越え、五マイルも歩かなければならないんだよ……こんな夜には僕でも一

マイルを歩くのさえ、危険を冒す前に熟考したよ。」

彼が眠ってしまったから長い間、彼女は横になりながら嵐に耳を傾けていた。煙突の上の通気口を確認するために、彼らはストーブの蓋を一部開けておいたので、開けてあった寝室のドアを通して、台所の壁に炎と影がきらめくのを見ることができた。炎は跳び上がり、幻想的に消えた。彼女が長く見れば見るほど、それらは元気づくようだった。彼女に向かって脅迫する影があり、それは巨大で黒く、部屋全体を吸い込むようだった。何度も何度もそれは進み、跳ぼうとして、いつも一条の光がそれを壁のほかのものの場所に落ち着かせた。だが、それは決して彼女に届かなかったが、彼女はそこに集められたのは、すべての凍りついた荒野と恐怖と打ち負かされないものの核心であると感じ、ちぢこまった。

それから、彼女はしばしまどろみ、そして影はジョンだった。絶え間なく彼は前進した。光の線が相変わらず揺れ、輪をつくったが、今突然、素早く動く小さな蛇になり、今日の午後、雪の上を横切ってくねり、震えるのを感じたものだった。そして、それらは進んできた。それらはもたえ苦しみ、消え、再び現れた。彼女は横になったままで、身体が動かなかった。彼は今彼女の上に覆いかぶさっていて、触れそうなのでも近くにいた。すでに、人を絞め殺すために硬直した手が彼女の喉の上にあるようだった。彼女は悲鳴を上げようとしたが、唇は動かなかった。ステーキブンは彼女の横で

気にすることもなく眠っていた。

突然、彼女が見つめながら横になっていると、一筋の光が彼の顔をあらわにした。そこには、恐れや怒りのしるしではなく、ただ、静かな、石のような絶望があった。

それはジョンらしくかった。彼は後ずさりを始めたので、彼女は必死になって彼を呼び戻そうとした。「本当じゃないわー本当じゃないー聞いて、ジョンー」しかし、言葉は彼女の唇に凍りついていて、もはや、そこには、再び聞こえる風の悲鳴、霜の降りた軒、壁の上で跳んだり、ねじ曲がったりする影だけしかなかった。

彼女は起き上がり、びっくりし、目覚めた。そして、彼が彼女の近くに立って、顔に突然の老いと悲しみを浮かべている姿があまりに生々しかったので、最初、彼女は夢を見ているだけだとわからせることができなかった。部屋に彼がいるという確信に逆らって、彼はまだ丘の向こうの父親のところにいるに違いないと何度も何度も主張することが必要だった。影を眺めながら、彼女は眠入ってしまった。彼女の気持ち、想像力だけが、彼が帰ることはありえないことであり、認めたくないがゆえの悪夢にうなされた。しかし、彼は帰らないだろう。ステイブンは正しかった。そんな嵐の中彼は帰ろうとはしないだろう。彼らは安全で、二人だけだった。誰もこれからも知らないだろう。それは、ただの恐れ、病的で、非合理的なものだった。彼女の、女性であることを新しく見つけ、挑戦したという罪悪感だけは完全に抑えることはできなかった。

シンクレア・ロス「ペンを塗ったドア」(久野幸子)

彼女は気づいた。彼女はそれまで彼女自身にそれが罪悪だと理解させ、認めさせることができなかったが、夜の風に吹きちぎられた静寂の中での彼の顔がそれを彼女に強いた。暗闇から石のような悲しみをたたえて彼女を見ていた顔は本当にジョンー単なる肉や骨が描くことができる容貌以上にジョンーの顔だった。

彼女は静かに泣いた。光の切れ切れの筋が沈み始めた。とうとう天井や壁に微かな炎の輝きしか見えなくなった。小さな住宅は震え、泣き、冷たさが再び忍び込んできた。ステイブンを目覚めさせないで、火を起こすために、ベッドから出た。薪は今や、一、三のおき火になっており、彼女が入れた薪はなかなか燃え上がらなかった。風はドアの周りにかかっていた毛布を通して旋回し、空虚なうめき声を上げ、あたかも意志に反して嵐の突進にもっと長く仕えるように煙突を再び登って行った。

長い間、彼女は耳を傾けながら、ストーブの上に屈みこんでいた。夕方早く、ランプに灯をともし、火をたくと、住宅は荒野に対する一つの屋台、人間の存在意味と生き残りの原理を主張する壁の弱い避難所のようなものだった。今、寒い、キーキーと鳴る暗闇の中、嵐に略奪され、再び捨てられ、奇妙に消えてしまった。彼女はストーブの蓋を開け、燃えさしが薪の周りを火の小さい舌で素早く舐めだすようにするまで、風を送った。それから、蓋を戻し、両手を広げ、その姿勢で凍りついたように、立って待ち続けた。

今度は長くはなかった。数分後、彼女は通気口を閉め、炎がお互

三一

いに旋回しながら、ストーブの蓋にあたり、光のきらめきを送り出されると、暖かさが彼女の硬直した手足に登り始めた。身震いし手足がかじかんでいたときのほうが気が楽だった。身体が暖かくなる、さらに執拗な心の苦しみが再び活動し始めた。彼女は影がジョンであったことを思い出した。彼女は彼が自分のほうに傾くのを見た、それから、身体を戻したときの、青白く、責められないゆえの悲嘆で暗くなった容貌を。彼女は一緒に過ごした七年間を思い起こし、回想して、それらが価値と威厳のある年月であったことに気づいた。とうとう、完全に打ちひしがれ、苦しみと償いへの突然の必要に捉えられるまで、彼女は部屋を横切って隙間風がひどいところへ行き、長い間、氷のような床にたじろがずに立っていた。

嵐はここに接近していた。毛布を通してさえ、彼女の顔に雪の片を感じることができた。軒がキーキー鳴り、壁はきしみ、風は唸り声をあげながら逃げるオオカミのようだった。

だが、突然、彼女は自問した。ほかの嵐、ほかのブリザードはあったのだろうか。そして、最もひどいブリザードの中で、彼はいつも彼女に届いたのではなかったかしら。

その思いに捉えられて彼女はしばらく立ちつくした。彼女が自分を欺くことができたのか、情熱の一瞬が彼女の中で、良心だけでなく、理性や配慮まで和らげることができたのか、今は判断するのは難しかった。ジョンはいつも来た。嵐が彼を止めることは絶対にありえなかった。彼は強く、冷たさに鍛えられていた。彼は少年時代

よりずっと丘を越えていたから、あらゆるクリークの水底も峡谷も知っていた。こんなことをするのは、気違い沙汰だった—待つこと。まだ時間があるうちに、彼女はステイブンを起こし、急いで去らせなくては。

しかし、寝室で再び、ステイブンの横に立って、彼女は躊躇した。これらすべてから超絶している彼の穏やかな、安らかな寝息には、健全さと大きなリズムがあった。彼には何も起こらなかったのだ。何も起こらないだろう。もし彼女が彼を起こしても、彼は笑うだけで、嵐に聞き入るように言うだろう。すでに、真夜中はどうに過ぎていた。ジョンは道に迷ったか、結局、出かけなかったのだ。そして、彼女は彼の献身に何か無謀なところがあるのを知っていた。彼は決して耐えられる以上に嵐で危険に会うことはしないだろうし、彼女の運命や将来を危険にさらすような犠牲を彼自身に許すはずはなかった。彼らは二人とも安全だ。誰も知らないだろう。彼女は自分を抑制しなくては、ステイブンのように正気にならなくては。

慰めを求めて彼女はしばらくステイブンの肩に片手を置いた。彼は今目覚め、彼女と共に、彼女の罪を分け持ってもらったほうがいいだろう。しかし、ちらちらする光のなかで、彼のハンサムな顔を見つめながら次第に、彼には罪は存在しないことを理解するようになった。何の情熱もないように、葛藤もなかった。正気の状態の把握、期待しているちょっとした微笑み、そして、ジョンのとは違

う容貌には傲慢さ以外何もなかった。彼女は深くひるみ、彼女が彼の容貌にひたすら目を注ぎ、そんなにもハンサムで、そんなにも若いので、ジョンとは大きく異なっていると信じようとしたこと、それらが彼女の正当化に違いないことを思い出していた。

ちらちらする光の中で、彼の容貌はまだ若く、まだハンサムだった。もはや彼女の正当化は存在しなかった―彼女には今わかった―ジョンがその人だった―しかしまだ物欲しそうに―それらの力と暴虐をきびしく不思議がり、彼女は再びステイブンの顔をちよっとのあいだ、指先でさらった。

彼女は彼を責めることができなかった。情熱はなかったし、罪もなかった。従って、責任もなかった。半ば微笑み、唇を緩め、達成に良心の呵責もなく満足そうに眠っている彼を見下ろしながら、彼が身体全体で明らかにしているもの―これまでもこれからもあるかもしれないものを理解した。ジョンがその人だった。彼と共にすべての将来がある。今晚のために、罪を深く悔いて、これからの毎日毎年、ゆっくりと彼女は償おうとするだろう。

それから彼女は台所にそと戻って行った。そして考えることもなく庄倒的な必要性にせかされ、隙間風がまだ冷たいドアのところへ戻った。従第に、朝に向けて嵐は静まり始めていた。恐ろしい風は弱々しい疲れ切ったうめき声になった。光と陰の躍りはおさまり、冷たさが再び忍び込んだ。いつも軒はキーキーと音を立て、無言の予言に悩まされていた。それらすべてにかまわず、時計は愚か者の

シンクレア・ロス「ペンキを塗ったドア」(久野幸子)

ように満足し、ティクタク鳴っていた。

彼らは彼を翌日見つけた。家から一マイルも離れていなかった。嵐に押し流されて、彼は自分の牧場の柵に向かって走り、そこで追いつかれて、硬直して、鉄線を両手でしっかりと握り占めて凍死していた。

「彼はここの南にいた」彼女が彼がどのように丘を越えたのかを話したとき、彼らは不思議がった。「まっすぐ南に行けば―どうして彼は建物を見失ったのだろうか。昨夜、同時に四方から吹いていた風のせいだ。彼は出かけるべきじゃなかった。月の周りに二重の輪があったよ。」

彼女は彼らをちよっと見て、通り過ぎた。そして、あたかも自分自身に聞かせるように、ただ「もし彼を知っていたら、けれども―彼は試すだろう」と言った。

後になって、彼らが彼女をしばらく彼と二人だけにしたときがあった。彼女は膝まずき、彼の片手に触れた。彼女の目はうるんだ。彼のまだとても強い、忍耐強い手だった。それから、立ちすくみ、彼女の目は、突然見開かれ、はっきり見た。彼の掌には、凍りついた掌の白さの中でも白く、小さなペンキの染みがあったからである。

(作者紹介)

シンクレア・ロス (Sinclair Ross, 一九〇八―一九六六) はカナダ西部平原を舞台に多くの作品を書いた作家である。サスカチュワン州出身。北部サスカチュワンのシエルブルック近くの自作農場に生まれる。七歳のとき、両親が離婚し、以後、他の人の自作農場で家政婦として働く母親に育てられたという。母親はスコットランド系移民の子孫であった。高校を十一学年で中退し、カナダロイヤル銀行に就職、サスカチュワンの多くの小さな町で銀行員として勤務した後、一九三三年にウイニペグの銀行に転勤した。一九四二年から一九四六年までの軍役に服した期間を除き、一九六八年に退職するまでの約三五年間、銀行に勤め続けた。その間も作家活動を継続し、生前、小説を四冊、短編集を二冊出版している。退職後はギリシヤやスペインに住んだが、一九八〇年、モントリオールに戻り、二年後、バンクーバーに転居した。一九九六年、パーキンソン氏病で死去。

彼を一躍有名にしたのは、小説『私と私の家は』(As For Me and My House, 一九四一)がニューヨークで出版されたときである。この小説は平原の町ホライズンに住む牧師ベントリーと妻のベントリー夫人の大不況期の生活を、妻の日記の形式で描いたもの。小説としては「このほか、『井戸』(The Well, 一九五八)、『金騒動』(Whirl of Gold, 一九七〇)、『ソウボーンズ記念』(Sawbones Memorial, 一九七四)がある。ここに訳出した「ペンキを塗ったドア」は最初、

一九三九年に *Queen's Quarterly* 誌に掲載されたもので、一九六八年に出版された短編集『真昼のランプ』そのほかの短編集『(The Lamp at Noon and Other Stories)』に収められている。もう一冊の短編集は『競争そのほかの短編集』(The Race and Other Stories, 一九八二)である。